

## メッセージアウトライン ルツ記4:1～22

### 「救い主の家系に」

ボアズはモアブから帰って来た姑のナオミとともに生活しているモアブ人の嫁ルツから結婚を求められた。これはルツの幸せを思う姑ナオミの勧めによるものであった。姑ナオミの夫エリメレクはすでに死んでおり、ナオミは経済的な理由のためにその土地を売ろうとしていた。→4:3 しかし、もしナオミがその土地を親族でない他人に売るならば、夫エリメレクの名と土地はその部族(ユダ部族)の中から消えてしまうことになる。そうならないためには近い親類が買い戻さなければならなかった。これはイスラエルの律法の中に記されていることである。→レビ25:25 そして近親者がこの土地を買う時は、未亡人を養う義務が生じるだけでなく、彼女もしくは彼女の嫁と結婚して子を生み、その子にこの土地を継がせる義務があった。→創世記38:8, 申命記25:5~6

買い戻しの権利があるボアズはルツの願いを受け入れ、親戚である死んだエリメレクの土地を買い戻すために直ちに行動に移った。

[1]「一方、ボアズは門のところの上って行って、そこに座った。すると、ちょうど、ボアズが言ったあの買い戻しの権利のある親類が通りかかった。ボアズは彼に言った。『どうぞこちらに来て、ここにお座りください。』彼はそこに来て座った」

イスラエルの町は城壁で囲まれており、ベツレヘムも例外ではなかった。そしてその門の前はかなりのスペースの広場になっており、市場にもなれば、人々の交わりと憩いの場にもなり、裁判所にもなった。神のなさることに無駄はない。ボアズが町の門のところに行くと、すぐにボアズより近い買い戻しの権利のある親類がそこを通りかかった。ボアズは座をもうけ、その親類を呼び、座らせた。

[2]「ボアズは町の長老十人を招いて、『ここにお座りください』と言ったので、彼らも座った」

ボアズはこれからの裁判が完全であるように十人の長老を証人として招いた。彼は町の有力者であったので(2:1)、このようなこともスムーズにできたのであろう。

[3-4]「ボアズはその買い戻しの権利のある親類に言った。『モアブの野から帰って来たナオミは、私たちの身内のエリメレクの畑を売ることにしています。私はそれをあなたの耳に入れ、ここに座っている人たちと私の民の長老たちの前で、それを買ってくださいますと言おうと思ったのです。もし、あなたがそれを買い戻すつもりなら、それを買い戻してください。けれども、もし、それを買い戻さないのなら、私にそう言ってください。あなたを差し置いてそれを買い戻す人はいません。私はあなたの次です。』彼は言った。『私が買い戻しましょう。』」

エリメレクの土地だけと思った親類は「私が買い戻しましょう」と言った。一件落着のように見えたが、ボアズはそれに続けて言った。

[5]「あなたがナオミの手からその畑を買い受けるときには、死んだ人の名を相続地に存続させるために、死んだ人の妻であったモアブの女ルツも引き受けなければなりません」

これもイスラエルの律法に書かれている定めであった。

[6-8]「するとその買い戻しの権利のある親類は言った。『私には、その土地を自分のために買い戻すことはできません。自分自身の相続地を損なうことになるといけませんから。私に代わって、あなたが買い戻してください。私は買い戻すことができません。』昔イスラエルでは、買い戻しや権利の譲渡をする場合、すべての取り引きを有効にするために、一方が自分の履き物を脱いで、それを相手に渡す習慣があった。これがイスラエルにおける認証の方法であった。それでこの買い戻しの権利のある親類はボアズに、『あなたがお買いなさい』と言って、自分の履き物を脱いだ」

エリメレクの土地の買い戻しだけを考えていた近親者はルツと結婚してエリメレクの相続者を起こす義務があると知ると、しり込みをした。

この買い戻しの権利譲渡のために、履き物を相手に渡すという習慣は→申命記25:7-10

ボアズは計略や悪だくみによらず、正直にこれらの取引を進め、契約を結んだ。正直こそ物事を進めていく最高の手段である。

[9-10]「ボアズは、長老たちとすべての民に言った。『あなたがたは、今日、私がナオミの手から、エリメレクのものすべて、キルヨンとマフロンのものすべてを買い取ったことの証人です。また、死んだ人の名を相続地に存続させるために、私は、マフロンの妻であったモアブの女ルツをも買って、私の妻としました。死んだ人の名を、その身内の者たちの間から、またその町の門から絶えさせないためです。今日、あなたがたはその証人です。』」

ボアズともう一人の近親者とのやり取りは、そこに座っていた十人の長老たちだけではなく、その様子を見守っていた町の多くの人々がいた。現代風に言えば傍聴人であろう。

そしてボアズは彼らを証人として公にエリメレクの土地の買い取りとルツとの結婚を宣言した。

ボアズは終始一貫、公明正大で堂々とした態度である。

[11-12]「門にいたすべての民と長老たちは言った。『私たちは証人です。どうか、主が、あなたの家に嫁ぐ人を、イスラエルの家を建てたラケルとレアの二人のようにされますように。また、あなたがエフラテで力ある働きをし、ベツレヘムで名を打ち立てますように。どうか、主がこの娘を通してあなたに授ける子孫によって、タマルが

ユダに産んだペレツの家のように、あなたの家がなりますように。』

十人の長老たちと共に町の多くの人々が交渉の結果を見守っていたが、町の人々はみなナオミとルツに好意的であったので、この結果を見て満足し、祝福した。ラケルとレアは先祖のイスラエル(ヤコブ)の妻。彼女たちによって十二人の男の子が生まれ、イスラエルの十二部族が構成されていった。→創世記29~30章、35:16~19 エフラテはベツレヘムの古名。しばしば並べて用いられる。ペレツはイスラエル(ヤコブ)の子ユダの嫁タマルによって生まれた子。→創世記38章  
ボアズの先祖ペレツと同じように主がボアズとルツを祝福してくださり、良い後継ぎが与えられるようにと人々は期待する。

[13]「ボアズはルツを迎え、彼女は彼の妻となった。ボアズは彼女のところに入り、主はルツを身ごもらせ、彼女は男の子を産んだ」

「主はルツを身ごもらせ」…このような表現は旧約聖書中ここだけで、主の特別な祝福であったことを示している。彼女は前夫マフロンと生活していた間、十年間不妊であった。→ルツ1:4~5

そして彼女は男の子を産んだ。

[14-17]「女たちはナオミに言った。『主がほめたたえられますように。主は、今日あなたに、買い戻しの権利のある者が途絶えないようにされました。その子の名がイスラエルで打ち立てられますように。その子はあなたを元気づけ、老後のあなたを養うでしょう。あなたを愛するあなたの嫁、七人の息子にもまさる嫁が、その子を産んだのですから。』ナオミはその子を取り、胸に抱いて、養い育てた。近所の女たちは、『ナオミに男の子が生まれた』と言って、その子に名をつけた。彼女たちはその名をオベデと呼んだ。オベデは、ダビデの父であるエッサイの父となった」

「その子の名がイスラエルで打ち立てられますように」…ベツレヘムだけではなく全イスラエルでその子の名が広がり、勢力ある確固とした人となりますようにとのことばである。

「七人の息子」とは多くの息子という意味で、町の女たちはルツが多くの息子たちにもまさる嫁であるとほめている。この子に付けられた名前の「オベデ」とは「仕える者」という意味であり、ナオミに仕えて老後を養うことが期待されているが、さらに広い意味では神と人にと仕える者となることも含まれているであろう。

[18-22]「これはペレツの系図である。ペレツはヘツロンを生み、ヘツロンはラムを生み、ラムはアミナダブを生み、アミナダブはナフシオンを生み、ナフシオンはサルマを生み、サルマはボアズを生み、ボアズはオベデを生み、オベデはエッサイを生み、エッサイはダビデを生んだ」

マタイ1:5の系図では「サルマがラハブによってボアズを生み」とあり、サルマはあのヨシュアの命によりエリコの町を偵察に行った二人の斥候のうちの一人名とされる。→ヨシュア記2章。

そしてラハブはそのエリコの町の遊女でイスラエルの二人の斥候をかくまい助けたことにより、その一族は滅びから救われ、イスラエル人の中に住むこととなり、彼女はサルマと結婚したのであった。

ルツはオベデを産み、やがて人となって来られる神の御子、救い主イエス・キリストの直系の祖先となった。彼女はイエス・キリストによって救われる人々のために備えられた女性であった。この家系の中にはユダヤ人だけではなく異邦人も含まれていることが分かる。ラハブはカナン人であり、ルツはモアブ人である。この系図からは神が決して異邦人の世界を見捨ててはおられないことを知らされる。

ボアズは買い戻しの権利のある親類として公にエリメレクの土地を買い戻し、エリメレクの息子マフロンの妻であったルツと結婚した。

やがてこのベツレヘムでルツと同じような貧しい一人の女性から全世界の救い主イエス・キリストがお生まれになる時代が来る。そしてこのイエス・キリストによって祝福が全世界に及ぶことになるのである。→ルカ1:26~35

「買い戻し」とは原語では「贖う」すなわち「代価を払って買い取る」という意味があり、最初に神によって造られた人間であるアダムが神の戒めを破って罪を犯して以来、この世界は呪われたものとなり、人間は罪の中にあり、神のさばきを受けて死すべき者、滅ぶべき者となっている。神に逆らい、真の神ではなく、自分の都合の良い偶像を作って神として拝み、自己中心的に生き、善をしようとしても悪を行い、憎み合い、さばき合い、戦い、殺し合っている。罪ある人間の心からすべての悪しきものが出て来るのである。→マルコ7:20~23

しかし、この罪ある人間を代価を払って神のものとして買い取ってくださるお方が神のもとから来られた罪のない神の御子イエス・キリストなのである。聖書にはこの救い主がこの世に来られ、ご自身の十字架の死によって私たち人間の罪を贖ってくださり、神のものとしてくださり、喜びと平安と希望を与えてくださることが記されている。

→ローマ3:23~24、ヨハネ3:16、エペソ1:7、コロサイ1:13~14、ヘブル9:15、I ペテロ1:18~19